



NPO 法人
**新エネルギーを
すすめる宝塚の会**

No.51

2025 年 11 月 7 日
理事長：橋本成隆
〒665-0022
宝塚市野上 1 丁目 1-8
(Tel: 0797-69-8800)
<https://rept.or.jp>

「こどもの未来にエシカルな「でんき」を」

～ こどもたちの未来のために「でんき」のことについて一緒に学びましょう ～

講師： 吉田 明子 さん
(よしだ あきこ)

(国際環境 NGO FoEJapan 気候変動・エネルギー担当)



とき：2025 年 11 月 29 日 (土) 14:00 ～16:00

(開場) オンライン、現地参加共 13:50～

ところ：「ソリオ2」4階 宝塚市立男女共同参画センター

学習交流室 1 AB & Zoom オンライン

(阪急・JR宝塚駅隣ソリオ2 4階)

参加費：無料 (現地で有志によるカンパ制)

申込方法：REPT ホームページにある「お知らせ」からお申込みをお願いいたします。

事前予約制 (現地当日先着 50 名まで)

(REPT ホームページ URL <https://rept.or.jp/>)

右 QR コードもご利用ください)

連絡先：メール info@rept.or.jp



●オンライン Zoom 参加の場合は上記申し込みページから申込みを頂くと、入力頂いたメールアドレスに Zoom 情報を返信いたします。

いまの日本の「でんき」のこと、こどもたちの未来のためにも一緒に学んでみませんか？

今回の勉強会で講師をしてくださる吉田明子さんは、国際環境 NGO「FoE Japan (エフ・オー・イー・ジャパン)」で、気候変動やエネルギー政策を担当されている環境活動家です。2007年から FoE Japan のスタッフとして活動を始め、現在は理事として活躍されています。

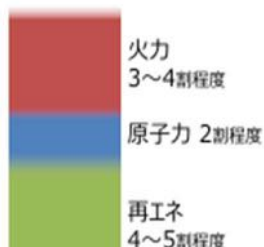
高校生のころ、ニュースで「京都議定書」が採択されたことを知り「このままでは地球がもたない」と強い危機感を抱いたことが環境問題への関心のきっかけになったそうです。大学では環境分野を学び、卒業後は調査会社で働いた後、環境 NGO の道へ進まれました。2011年の東日本大震災と原発事故を機に、「福島の人たちに寄り添いながら、原発に頼らない社会をつくりたい」と考え、脱原発・再生可能エネルギーへの転換を訴える活動を続けておられ、20

16年の電力小売り自由化の開始にあわせて市民や自治体、企業などと連携しながら、再エネ電力を選ぶ運動「パワーシフト・キャンペーン」を立ち上げて、どんな電気を使うかを自分で選べる社会を広める取り組みを推進中です。

また、吉田さんは「気候変動」は単にCO₂の問題ではなく、「人の暮らしや権利にも深く関わる問題」だと語り、気候

<図1>

2040年 発電電力量 1.1 ～ 1.2 兆 kWh 程度の電源構成



(出典) エネルギー基本計画の概要 資源エネルギー庁

変動の影響を受けやすい人々や地域に目を向けて公正で持続可能な社会への転換をめざされています。2025年2月に閣議決定された第7次エネルギー基本計画に対しては、私たちと同じ思いである「原発も化石燃料も使わず、持続可能な再エネ100%の未来を」との政策提言活動に尽力されました。ただ、残念ながら前号（ニュースNo. 50）でも触れた通り<図1>のような電源構成の計画がなされ、2040年において原子力が2割程度、火力が3～4割程度、再生可能エネルギーが4～5割程度という計画が決定されることに。

このエネルギー基本計画は、東京電力福島第一原子力発電所事故以降、必ず掲げてきた「原子力依存度を可能な限り低減する」の文言が初めて削除され、原発の建て替えも容認するなど原発回帰が鮮明です。

一方、国際的な動向に目を向けると、国際エネルギー機関（IEA）は、<図2>に示すように電源構成の8割は再生可能エネルギーになるとのシミュレーション予測しており、別の国際機関である国際再生可能エネルギー機関（IRENA）も同様の報告書を提出するなど、日本が目指す電源構成とは大きな隔たりがあります。

なぜ、燃料を国外から輸入し温室効果ガスを排出する火力発電を残し、原発事故のために今なお宝塚市の3倍もの面積が「帰還困難区域」として人が住めない土地にしまった原子力に依存するような計画になっていくのか？

龍谷大学の島堅一教授が解き明かされているように、既得権益者に都合がよく市民の「便益」が置き去りにされている計画になっています。例えば「統合コスト」という考え方が典型です。これは「既存の発電設備が稼働する中で、ある特定の電源を追加した際に電力システムに追加で生ずるコスト」として説明されており、どんなに優れた電源があったとしても既存の集中設備型である火力発電、原子力発電などの既存電源構成が有利になるコストの考え方です。

再生可能エネルギーの拡大は国外の資源輸入に頼らず脱炭素がすすむという「便益」があるものの、既存の設備集中型ではなく地域に分散された立地で発電設備が構築されるため総じて「統合コスト」が発生することになります。この「統合コスト」を発電コ

ストに算入する恩恵を受けるのは既存の集中設備型発電設備を持つ、電力自由化以前に地域独占で電力を供給していた旧一般電気事業者を中心とした既得権益者です。これまでエネルギー基本計画を策定する基本政策分科会のメンバーであった国際大学学長の橘川 武郎氏によると、基本政策分科会は原子力発電推進派が中心で「原発脳」に支配されているとのこと。政府や大手企業に日本のエネルギー政策をまかせていると私たち市民の「便益」は後回しの政策が推進されてしまいます。

では、どうすればいいのか？ 結局のところ私たち市民が連携して学び、情報を共有発信し、力を合わせて再生可能エネルギーの拡大をすすめて行くしかない、と思います。具体的にどういう取り組みが可能なのか？ 今回の勉強会で先行事例などを吉田さんに紹介頂きながら一緒に学びましょう！

吉田さんの FoEJapan では、子供も一緒に気候変動について考え学ぶきっかけになる「気候変動かるた」を作成し販売されています。私たちも一度体



験してみましたが、かるたの札に描かれている絵が印象的で、未来を担う子供たちがかかるたで遊びながら学ぶのにぴったりです。お子さんとも一緒に参加していただければ嬉しいです。（橋本成隆）



◆ REPT主催の読書会（第一回）を開催しました！◆

夏の暑さが年々厳しくなることを痛感する 8 月の 22 日、「安田陽先生『2050 年再エネ 9 割の未来』を読む」と題した読書会が、宝塚男女参画センターで開かれました。これは、REPT 会員の知識を深めたい、会員同士の交流の場をつくりたい、会員ではない人々が REPT を知り参加するきっかけをつくりたい、といった想いから始めた読書会企画の、初めての回でした。

読書会を始めるにあたってふさわしいのは、やはり以前 3 回に渡り REPT 主催ファクトフルネス講座で科学的ものの見方を教えてくださった、現在ストラスクライド大学電子電気工学科アカデミックビジターの安田陽先生の最新書籍！ということで、2024 年 12 月に山と溪谷社より発行された「2050 年再エネ 9 割の未来 脱炭素達成のシナリオと科学的根拠」という本をとりあげ、その中に書かれている「5 つの神話」を、一回の読書会でひとつずつ「解体」していくことにしました。

当日参加されたのは、REPT 運営委員や会員、そして他団体のメンバーの方々。はじめに自己紹介にも時間をかけ、和やかな雰囲気の中、まずは私、吉田美樹のリードにより本の対象箇所を皆で再度（可能な限り事前に読んで

きていただきました）読み解きました。

その内容をここにご紹介したいと思います。

まず本の中で言われる「神話」とは何か。それは、科学的根拠なく広く語られていることで、そこには「NO！」を突き付け、「先入観と偏見を捨て」、「今までの常識を疑い」、「情報は鵜呑みにせず一次ソースにあたかなければ」なりません。今回取り上げた神話は「再エネはコストが高い」というもの。実は確かに「日本の再エネの発電コストは依然として世界水準より高い」のです。しかし日本で広く語られるのは、この一文から一部だけを抜き取った（綺麗なさくらんぼだけを摘む「チェリーピッキング」という表現が使われます）「再エネはコストが高い」という文章。私たちはこれを鵜呑みにせず、より広い視野で情報を集め、何と比べてコストが高いのかを明らかにし、それらの情報を分析的に読む必要があります。この本の対象箇所の中で、そのように分析的に情報を読み「再エネはコストが高い」という神話を解体すると、「さまざまな見方がある」というひとつの結論がでできます。ここに、5 つのさまざまな見方を紹介したスライドを載せましたので、ご覧になってみてください。

さまざまな見方1

日本の再エネは「世界平均に比べ」コストが高い (P89)

- より広い視野で→IRENA(国際再生可能エネルギー機関)報告書参照
- 何と比べて→世界平均と比較

太陽光発電の発電コスト(2023)：日本は世界平均の約2.5倍
陸上風力発電の発電コスト(2023)：日本は世界平均の約3.8倍

さまざまな見方2

「過去と比べると」日本の再エネもコストが安くなってきている (P89)

- 何と比べて→過去と比較

2010～2023年の日本の発電コストの下落率
太陽光：77%
陸上風力：32%

さまざまな見方3

「2022年以降は」日本の再エネは「化石燃料より」安い (P89)

- 何と比べて→他の電源と比較

2021年以降 化石燃料の発電コストが世界的に上昇
2022～23年 IRENA調査対象20カ国(日本を含む)全てで、化石燃料より太陽光・風力の方が、平均発電コストが安くなる

さまざまな見方4

日本の化石燃料も「世界に比べ」コストが高い (P90)

- より広い視野で→IRENA報告書参照
- 何と比べて→他の電源および世界平均と比較

天然ガスの平均燃料価格(2010~20):
日本は米国に比べ3.0倍、英国に比べ1.7倍高い
石炭の平均燃料価格(2010~20):
日本は米国に比べ1.9倍

さまざまな見方5

日本の再エネは「為替レートや建築費一般が上昇するなかでも」安くなってきている

- より広い視野で→再エネを取り巻く日本の状況

日本の土木建築関係のコストが上昇
工場の建築費、2015→2022年に1.3倍
為替レート、2010年→2024年11月に約1.7倍
それにも関わらず、再エネのコストは安くなってきている

また、安田陽先生が以前のファクトフルネス講座で仰っていた「その時には分からなくてもいいから、専門用語をコレクションしておくべき。インターネットで調べ物をする時にも専門用語で調べれば、学術的情報にたどり着くことができる」という方法に従い、今回の読書会でも二つの用語をコレクションしました。それは「外部不経済」と「便益」。日本では共有されていない世界の前提条件に、「従来型エネルギー源に外部不経済（隠れたコスト）があり、脱炭素・再エネに便益がある」というものがあります。外部不経済とは「市場取引の価格に反映されない隠れたコストを外部コストと言い、特にネガティブな影響を与えるものを外部不経済と言う。誰かに不当にかかる迷惑。」(P59)であり、便益とは「政府が一定のルールに基づいて市場に介入し（＝外部不経済の内部化）、社会全体が被っていた損失が緩和されてもたらされるメリットのこと」(P81)。今後も読書会を重ねるにつれ、このような専門用語をコレクションしていきます。

更に、安田先生提唱の「一次情報にあたる」体験にもチャレンジ。国際再生可能エネルギー機関（IRENA）が示す将来の電源構成シミュレーションや、第7次エネルギー基本計画策定時の議事録を確認し、「便益」という発言がない一方「コスト」というワードの発言が多数あり、原子力発電のコスト算出の妥当性を確認することなく評価していることを伺い知ることができました。今後も参加者で学びを深める読書会を継続して開催予定です。（吉田美樹）



◆みんなで遊ぼう エル・フェスタ（夏休みイベント）出展報告◆

宝塚男女参画センターが主催する、幼児小学生連れ親子が主な対象である、毎年夏の恒例イベント「みんなで遊ぼう エル・フェスタ」。普段の活動ではあまり出会えない世代の方々に、環境に関する知識や意識を少しでも伝えられたら。REPTを知ってもらい、会員になるきっかけになったら。といった思いで、今年も8月23日のフェスタに出展してきました。

それまで何度も他団体との打ち合わせがあった後に迎えた当日。今回は「西谷の炭団（たどん）で遊ぼう」と題し、宝塚エコネット代表の梶原暢元さんと一緒に、炭団作りワークショップの実施です。森林に囲まれた西谷では昔は炭が多く作られていました。良い物は売られ、残りは各家庭で消費され、そこで使われた後の粉々になった炭は集められ、澱粉質のもので固めて作られた炭団。地域で作られたエネルギーが大切にされていたことを今に伝えるものです。

今回は現代風に、梶原さんがよくワークショップでなさっている次の方法の炭団づくりを、小さな子供から大人まで楽しんでもらいました。

- 手順1) 既に澱粉を含ませた炭団のかたまりをボールに出す
- 手順2) 手で粉々にする
- 手順3) 星やハート、色々な形のクッキー型に詰める
- 手順4) 型からそっと出す
- 手順5) 家に持ち帰った後は数日乾かし完成



作った炭団は、家の中での消臭剤や、BBQ の際のオシャレ燃料（小さいのでわずかですが）として使用することができます。

REPT としては環境や団体について知ってもらうきっかけとしてのワークショップという位置付けではありますが、同時に、何かを作り出す楽しい時間、自然のものが手に触れる心地よい時間、を提供できた 1 日でもありました。（吉田美樹）



◆今年も西谷フォーラム&フェアでREPTの活動を紹介◆

エルフェスタで REPT 陣営も慣れてきた炭団作りワークショップ。宝塚中央公民館で 9 月 27 日 28 日に実施された「第五回 西谷フォーラム&フェア」でも宝塚エコネット代表の梶原暢元さんと一緒に実施してきました。

前回と違って今回印象的だったのは、ご年配の方がよくブースに訪れてくださったことから、「炭団？知っている。懐かしい」という声を幾度も伺えたことです。今とは違う温かなエネルギーである炭や炭団が、ちょっと前まで日常的に作られ使われていたことを実感することができました。

このフォーラム第五回目のテーマは「西谷をつなぐおもしろい人々に出会う」。共同でブースを出した梶原さん、そして理事長の橋本さんも活動報告を行いました。



フォーラムの報告では、私たちが目指す「再生可能エネルギーでまちづくり」のビジョン、西谷地区に設置されている農地を活用するソーラーシェアリング、放置薪炭林を活用した「宝の森」里山体験イベントを紹介。基調講演をされた京都大学フィールド科学教育研究センターの館野教授からは、「里山の資源をエネルギー源として活用し、人もお金も地域で循環させる取り組みは是非継続してほしい」との暖かいエールを頂きました。（吉田美樹）



◆令和 7 年度第 1 回宝塚市再生可能エネルギー推進審議会 出席報告◆

9 月 18 日に市役所会議室で開かれた令和 7 年度第 1 回宝塚市再生可能エネルギー推進審議会。筆者は「市内の公共的団体等の代表者」として選出されている理事長の橋本さんと共に、聴講者として出席してきました。なお同じく聴講者として、一緒に市長室を訪問した市民団体「econowa TAKARAZUKA」の方もいらっしゃっていました。審議会の流れとしては、各議題についての用意された説明が環境エネルギー課からあり、それに対して「市内の公共的団体等の代表者」や「知識経験者」が質問を投げかけ応答を受けるといったものです。

＜議題 1＞は「再生可能エネルギー導入推進等の取組状況について」。環境エネルギー課からの説明内容はインターネットで「令和 7 年 9 月 18 日 宝塚市再生可能エネルギー推進審議会」と調べると出てくるページの「会議結果」にありますので、宜しければご覧ください。質疑応答では以下のような点が提起されました。

- 重点対策加速化事業は、技術が市において補助金なしでも定着していくという有用事例をつくるための事業である。従って他の市に伝えられるようなモデル化が重要。市民の行動がどう変わったかなどの事後評価を、市民へのインタビューなども交えながら行い、公表してほしい。
- 仲介業者や他自治体の動きを待つのではなく、働きかけながら先行事業を実施し、それを環境省に提案する立ち位置になってほしい。
- 市施設の再エネ電力調達に係るリバースオークションの導入にあたり、要件のひとつとしてエネルギーの地産地消率も入れてほしい。域内調達環境ガイドなども条件化すべき。例えば現在 1 円 2 円高くても、長期的に見ると経済的優位性も高い。

- 電源チェック依頼をする際の記録をとっておくなどして、電源が問題化した時に説明ができる準備をしておく必要がある。
- J-クレジットプロジェクト「関西エネワ」の参加者を募集し始めたが、自家消費分を売るだけではないクレジットも存在するので、それも検討すべき。

＜議題 2＞の「第 2 次宝塚エネルギー2050 ビジョンの進捗状況」に関する提起は以下の通りです。

- AI を活用するなどして進捗状況をグラフで記し、一般市民が見て分かるようにしなければならない。
- 日本、アメリカ、韓国以外の先進国では、再エネが急速に発展している。「今のままでツケを次の世代にまわしていいのか？」と子供や孫がいる世代に我々も訴えるべき。
- まずは正しい情報を市が発信すべきで、補助金はその呼び水として使うことができる。
- 市民はグラフの結果しか見ないため、啓蒙が重要。

＜議題 3＞の「再生可能エネルギー施策推進の今後について」に関する提起は以下の通りです。

- 日本では環境保全のことを考え再エネを推進しない、という流れがきている。しかし再エネ率を低下させたら、生物多様性にも悪影響が出てしまう。日本の現在の流れを止めなくてはならない。
- 再エネと省エネを一体的に審議していくという方針は合理的で良い。
- 新しいゴミ処理場が建設されるが、そこでは 8000 件分の発電量が見込まれる。そこから自家消費を引いても半分以上が残るので、それを再エネではないが CO2 フリー電力として公共施設で使うことができる。如何に地域の中でこの電力を活かして行けるか、検討しなければならない。

(吉田美樹)



◆ワタシのミライ主催 世界気候アクション in 大阪 とめよう！地球温暖化 2025.9.20 集会とパレード◆

「新エネルギーをすすめる宝塚の会 (REPT)」も賛同団体になっている気候変動を考えるグループ『ワタシのミライ・大阪』が主催する集会とパレードに REPT スタッフ 3 人で参加した。「脱炭素社会への公正な移行を急ぎ、2050 年までに自然エネルギー100%で豊かに暮らせる社会を創るため、市民がつながり変化を広げていく新しいムーブメントです。」と集会で配られたリーフに書かれていた。

会場には文化祭でこの問題を取り上げた高校生とそれを指導した先生や、各地で活動するグループが来ていて、私が普段行く集会より平均年齢が若いのが新鮮だった。

まずは、『PEOPLE POWER 気候変動と日本 II』上映

・個人のライフスタイルを変えるだけでなく社会やシステムが変わらないといけない ・どれくらいの危機なのかをわかっている人は少ない ・気候変動を解決するものにお金の流れを変えていく ・気候危機はもうあと 10 年もないくらいのタイムリミットに来ている ・全人口の 3.6%の人が動けば変化が生まれる ・怒りだけだと持続しない など、映画の主張はひとつひとつ頷くことばかりだった。続いて、グループの活動報告

10 代～20 代の若者たちが CO2 排出量の 3 割を占める主要電力事業社に対し、排出削減を求め若者気候訴訟という民事訴訟を提起している。これをアピールした立命館大学 4 回生の女性は原告になった理由を「誰かに変えてもらうのを待つのはやめよう。私たちは被害者であり加害者だ。気候変動は自然災害ではなく人災。私たちの選択の結果だから」と述べた。



「ウータン・森と生活を考える会」は、パーム油を作るために熱帯雨林が破壊されオウータンが絶滅の危機にあるとアピール。「大阪から公害をなくす会」は 1971 年から活動しているが公害は終わっていない。どの公害も人間の活動によって起きて、住民よりも企業を優先してきた結果だと発言した。「サンサンすいた」からは資金を募り老人ホームに発電設備を作ることが出来、今年 4 月に点灯式をしたとの報告があった。REPT も活動を報告した。

スウェーデンのグレタ・トゥーンベリさんが始めた活動、スウェーデンの施策がパリ協定に一致するまで毎週金曜にストライキをする—これが“Fridays For Future”という地球温暖化に抗議する運動として全世界に広がり、2019 年 3 月 15 日には 125 か国 100 万人以上が行動を起こした。ひとりの行動からここまでうねりになり、今回の大阪のアクションにもつながっている。グレタさんの獅子奮迅の働きがなければ広がらなかっただろう。しかし、2025 年の今、極端な大雨や異常な高温の発生は地球温暖化によるものと気象庁が言っているように、事態は悪くなる一方だ。加えて、戦争も殺戮や破壊の悲惨さのみならず、大量の CO2 を発生させる原因ともなっているのを世界が看過してよいものだろうか。

はて、さて、どうすればいいか。「一人ひとりができるところから」という言葉もまどろっこしくてイライラする。でも、でも何も考えないでいることは一番罪かもしれない。この集会の後中之島から西梅田までパレードをした（人数が少ないのが残念だった）が、それでもアピールすることで誰かに伝わることを願う。「温暖化」「気候危機」それらの言葉を多くの人が噛みしめ、伝えること。何もしないであきらめたら事態はどんどん悪くなる。ワタシのミライは次の世代のミライへと続かせないといけない。

（辰野純子）

全国各地で 10,000 人が参加！本気の気候変動対策を求める市民の声を繋いだ「気候アクションウィーク 2025」／ワタシのミライ 認定特定非営利活動法人 FoE Japan のプレスリリース

<https://prtmes.jp/main/html/rd/p/000000076.000077060.html>



◆2025 年ソーラーシェアリング市民農園のさつまいも収穫が終わりました！◆



宝塚すみれ発電、コープこうべ、近畿大学、龍谷大学がコラボしている、ソーラーシェアリング市民農園のさつまいも収穫が無事に終了。今年の暑さをものともせず、収穫量は期待通りで十分なものとなりました。

毎年多くの学生たちがやってきて、その数は昨年のカウントですでに 100 名（近畿大学のみで）を超えています。今夏は東京で行われたソーラーシェアリングフェスティバルにも参加してくれた 3 年生、4 年生のみなさんが、目を見張るような活躍ぶりです。またうれしいことに、その中のひとりがコープこうべに就職が決まった、と報告してくれました。収穫にも来てくれていた Y 君に、就職の決め手は何だったのか、を尋ねてみたら、「ソーラーシェアリング市民農園の活動があったから」と即答してくれました。なんとたのしいこと！コープこうべの環境統括含め、その場にいたコープこうべの職員のみなさんがとても喜んでおられました。

私たちの活動の意味を理解し、このようなところで働きたい、と思う若者が出てきてくれたことを誇りに思います。今、ソーラーシェアリング市民農園は徐々に知名度が上がってきていますが、それはたくさんのメディアの後押しもあってこそ。今夏、金子勝氏が取材してくださった、生活クラブの記事もまた私たちのことを強く応援してくださる内容になっています。（以下のページからお読みください）

[https://seikatsuclub.coop/news/index.html?TAG=0100000000000000000060&TAG=&TAG=&TAG=&TAG=&TAG=&TAG=&TAG=&TAG=](https://seikatsuclub.coop/news/index.html?TAG=0100000000000000000060&TAG=&TAG=&TAG=&TAG=&TAG=&TAG=&TAG=&TAG=&TAG=)

そして、今年度のソーラーシェアリング市民農園の活動は最初から動画撮影されており、これはコープこうべが記録に残したいということでプロのカメラマンにお願いしています。それは記録どころか、とても素晴らしい映像作品になっており、11月29日にはコープめふにてソーラーシェアリング市民農園の振り返りの集いをおこなうのですが、その場でお披露目されるそうです。メディアと言えば、近畿大学を通じて JCOM の取材も入っており、今年は畑にコープこうべと JCOM の取材カメラが二台並ぶという、なんとも贅沢な空間が出来上がったのでした。最初は固くなっていた学生たちも取材慣れしてその時間を楽しんでいるようでした。春からの関西万博もあり、兵庫県ではフィールドパビリオンという試みもあったせいで、北摂里山フィールドパビリオンの中に宝塚すみれ発電も取り上げられました。オフィシャルポータルガイドも発行され、そのページには 28000 人もの人が訪れたそうです。いろんなところで配られたであろうこのガイドを見て、私たちの活動を知った人もいないのでしょうか。また今年は視察、見学会がとても多いです。これは市民農園でソーラーシェアリング事業をおこなっているところが、残念ながら国内で唯一弊社だけだからです。研究していただくよりも実践してもらうこと、これが宝塚すみれ発電の願いです。

今、農水省に対して「望ましい営農型太陽光発電に関する検討会への意見書」をソーラーシェアリング推進連盟として出す動きになっています。私たちの望む、農業を第一に考えたソーラーシェアリングの行方を推進連盟の理事としてきちんと指し示したいと考えています。国際社会はソーラーシェアリングを認め、その有用性を後押しする施策もはっきりしています。ソーラーシェアリング発案者である日本はもっと頑張らなければなりません。（宝塚すみれ発電 代表取締役 井上保子）

＜宝塚すみれ発電の発電状況＞



最新の詳しい発電情報は、宝塚すみれ発電のホームページ（<https://sumire.bona.jp/> か、左記 QR コード）にアクセス頂き、上部メニューの「発電所情報」からご確認いただけます。（井上 正弘）

●寄付と会員継続のお願い

ここ数年 R E P T の会員が減少しつつ、学習会などの参加者も少なく、継続した活動が危ぶまれる状況です。

新たな仲間を増やすべく、特に子育て世代など若い世代にメッセージが届くよう情報発信方法の刷新を進めています。昨年度はイベント参加の機会を増やす計画があったので直接手渡しできるリーフレットを刷新し、あわせて R E P T のロゴも作成しました。今後はホームページや SNS などの見直しを進めたいと考えております。

第7次エネルギー基本計画で明らかになったように、火力発電、原子力発電を温存する政府の計画に任せることなく、今こそ私たち市民ひとりひとりが力を合わせて地域に根差した持続可能な再生可能エネルギーの拡大をすすめる活動が必要だと痛感しています。継続した活動には皆さまの温かいご支援が必要です。是非とも寄付や会員の継続にて応援をお願いします！

＜振込先情報＞

- ゆうちょ銀行からお振込みの場合
口座名：（トクビ）シンエネルギー・フラスメルタカラツ・カノカイ
記号：00940、番号：328299
- ゆうちょ銀行以外からお振込みの場合
振込先金融機関名：ゆうちょ銀行
支店名：〇九九店
口座科目：当座、口座番号：0328299
口座名：（トクビ）シンエネルギー・フラスメルタカラツ・カノカイ

お振込み頂いた際には下記に連絡をお願いします。
＜メールアドレス＞ info@rept.or.jp

・インターネットからの入会申し込み

右の QR コードから申込み手続きできます。
会員の有効期間は申込み月から 1 年（12 か月）です。
「会費ペイ」というサービスを利用しており、特に申し出がない限り自動更新になります。

